

---

# 風の吹く世界

りん太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風の吹く世界

### 【Nコード】

N6586I

### 【作者名】

りん太郎

### 【あらすじ】

4000Hitありがとっざいます。

学校をサボって帰宅した悠斗と美春。

帰り途中に妙な風に包まれると見た目はいつもと変わらぬ風景なのに違和感を感じる世界になる。

そんな中、突如現れた森へ足を踏み入れることになるが、ここは本当に自分たちの知っている世界なのだろうか…？

## ハジマリ。(前書き)

始めまして、りん太郎です。

初めての創作、初めての投稿になります。

短編物からやってみたかっただのですが、いきなりストーリー物を書いてしまいました。

頑張っ書こうと思いますので最後までお付き合い頂けたら幸いです。

## ハジマリ。

親元を離れ県外の高校へ入学してから1年と数ヶ月がたち、だいぶ寒くなってきた。たまに吹く風に木の葉が舞い踊るのを見ながら急いで帰宅をする。

そろそろ冬物のコートやらマフラーやらを用意しなくてはいいないだろうか。

「うおーさぶっ！早く帰ろ」

学校での友達はそのこいるが、やはり県外から来たせいなのか俺はなんだか居心地がいいとは言えなかった。なのでどうしても一人でいることが好きだったりして趣味はもっぱらゲームだ。

学校生活は別に苦でもないが楽しいわけでもない。

まあ、女の子のレベルが高いのは楽しい部類に入るのかもしれない。だからと言ってフラグがたつわけでもないのだが、新生活を送る際には色々ドギマギシチュエーションがあるんじゃないかって変な期待をしたもんだ。

「あゝ…何か面白い事ないかな…」

独り言を言い始めるとポケの始まりだっという話もあるが、もう殆ど口癖になっているセリフをぼやいてしまう。

今日は新しいゲームの発売日だ。今から面白い事が待ち受けているはずなのについつい口にしてしまう。

とは言え、ゲーム以外での面白い事というのが見つからないのでそういう意味では常に面白いことを探していると云えるだろう。いつもと変わらぬ日常なんてつまらなすぎて屁がでそうだ。

とりあえずは、新作ゲームのストーリーはどうだろうか、とかキアラには萌えられるだろうかとか、いろいろな妄想に耽りながら歩

く。

と、ふいに後ろからポコッと叩かれた。

「面白い事って例えば？」

振り返るとそこには同じクラス、同じ部活の女子、たきがわ みはる 滝川 美春がいた。

美春は所謂『非の打ち所がない人間』。

こんな人マンガの世界以外にいるのかと思うような成績優秀、眉目秀麗、スポーツ万能…ついでに言うと自宅も結構金持ちのお嬢様なんだとか？ホント、神様って不公平だと思う。ほんのちよつとでいいから俺にも分けてはくれないだろうか（特に成績部分）。

美春との出会いは高校に入ってからだ。まあ、出会いと言えるほど素晴らしいものではないが。

たまたま同じクラスで、たまたま隣の席だった。それだけの偶然なのだが、俺は内心「ラッキー」と思っていた。

そんでもってさらには同じ部活ときたら、ラッキーすぎだろ？  
しかもしかも、美春の家の方向と俺のアパートが一緒の方向なんて、いろんなワクワクドキドキな某恋愛シミュレーション的発想になつて\*\*や\*\*な事妄想するだろ！？こりゃもうフラグ確定！  
！？とか思いこんじまうよな？

しかし現実はそのよう甘くない。むしろ仲良くなれただけでも奇跡みたいなもの、偶然が重なるくらいでフラグなんて立たないと知ったのはつい最近のことだ。

だが、それでも周りの連中にしてみれば十分に羨ましいと思えるシチュエーションであると言えよう。なんせ高嶺の花と一緒に小突きあいをしているのだから。

「そうだな、例えば…100円くじで一等を引く…とか！」

「小つさ…」

「うお！100円くじバカにすんな！あれには男の浪漫がどっさり詰まってるんだぞ!？」

「どんな浪漫なんだか…男ならそんな事よりもっとデッカイ夢はなの？世界がドカンと引つ繰り返つちゃうようなさ？」

そう言いながら俺の一步前を歩く。

ドカンと引つ繰り返つちゃうようなデッカイ夢ねえ…いくら考えても思いつくのはアイスの当たりを引くとか、雑誌の懸賞に当たるとか…そんな事ばかりだ。

「そういうお前は何かあるのかよ」

何かの参考にでもなるかと思いついてみる。

「んー、別に私は毎日楽しいからこのままでいいもの」

はー、さいですか。どつちが小さいんだか。

現状維持ほどつまらないものはないぜ。

やはり雑誌の懸賞に当たるくらいだとデカイよな！

などとデカイ夢を考えつつ、ふと我に返る。

「…おい、何でお前がここにいるんだ？授業はどうした授業は」

そう、今の時間は丁度午後の授業が始まったばかりの時間だ。

ゲームやりたさにサボる俺はともかく、真面目な性格の美春がサボるとはとても…。

「そのセリフ、そっくりそのままお返ししてあげるわよ、サボリー

マン竹井たけい ゆつと 悠斗！」

俺はサラリーマンじゃないっつもの！と心の中でツッコミを入れる。

「キミがそそくさと教室を出て行くのが見えたからね…ズルイじゃないー！」

うお、もしかしてサボリばればれ？

「俺は…風邪で具合悪いんだよ！」

バレているんじゃないかと思いつつも、とりあえず悪あがきを試みる。

「…ふーん…」

なんでも見透かされているようなこの「…」が恐ろしい…。

「じゃあ、キミの机の下に落ちてたコレはなにかな？」

「そう言っただけ腕を上げ紙切れをヒラヒラさせる。」

えーっと、あれは…。

あれ！？

「うお！それは今日発売のゲーム引換券！！」

俺は慌てて鞆の中をガサゴソと引つ掻き回す。が、ゲーム引換券は美春の手中にあるわけで、鞆の中にあるはずもないのだが思わず探してみたくなってしまふ真理は不思議なものだ。

「オーホホホ。この美春様を騙そうなんて100万年早いわよ」

くそ、こりゃ一本取られたぜ。

そんでもってお前いつから女王様キャラになったんだよ！美春フアンの男子共がショック受けるぞ！…いや？逆に喜ぶやつもいるか？おっと、そんなことより引換券が大事だ！

「ていうか100万年てお前いくつだよ！返せ！」

手から無理矢理奪い返すと鞆の中へさっさとしまいこむ。

はあ…疲しいゲームじゃなくてよかった、などと妙な安心をします。

しかし、今日は美春の目がある以上買いには行けなさそうだ。トホホ、明日までお預けか。

「んなことより美春もよく抜け出してこれたな、お前だって風邪引きには到底見えないぞ」

美春はふっふっふと含み笑いをしながら顔を寄せてくる。

「私くらい先生からの信用を得てると色々と言いつつも楽なのよ」

こ…こやつ…なかなかあくどいぞ。  
誰だ？真面目とか言ったやつ！訂正しろ！

しかし、笑いながら歩く彼女は本当にかわいい。

髪は栗色で肩より少し長いストレート、サラサラしていい臭いがしそうだ。

身長は…そうだな、俺より10数センチも小さいか？160前後といったところだろう。

大きなクリッとした目元がまたチャームで、どちらかというところ顔かもしれない。

スレンダーな体は赤いチエツクの制服がよく似合う…んでもって少し控えめな胸がまたたまらん。…と、おおっと、これはあまり洩らさない方がいい情報だっただろうか。

正直、こんな美人を連れて歩くのはなかなか気分がいいものである。

一緒に帰る姿を他の野郎共が見たら蜂の巣にされるだろうな。

ああ、ほら、今も周りの奥様やお姉様達が俺たちを噂している。

「見て見て！あのカップル！」

「え〜？あの子あんなにキレイなのにどうしてあんな男連れて歩いてるの？」

「美人って自分がないもの求めるって言うからね〜」

…っておいこら！！！！

俺はあんな男扱いかいつ！失礼だな！そんなに酷くないと思うんだけどな…

俺だつてイケメン！とまでは言えないがまあ普通だと思う。

やはり黒い髪の手チュラルヘア（俗にボサボサともいうが）はダサイのだろうか…。

身長だつてそんなに低いとは思わない。というか176センチも

あれば十分だろ！メタボなんてのも無縁だしな！

確かに、女子のことしか考えなかつただろ、と言いたくなるような赤チエツクの制服は似合っていないと思うが、俺なりに着こなしているつもりだ。

お姉様方の言い分もわからんでもないが、内心凹む。

第一に、美春に釣りあうようなイケメンなんているのだろうか？  
いたとしても俺は認めないけどな！

美春はそんな噂話聞こえているのか、いないのかくると振り返り最大級の微笑みを向ける。

ぐ…かわいい過ぎる。

「ほらほら、100円くじに夢見る少年よ！早く行こ？」

その瞬間、ざあっと風が吹いた。

いや…単に風と言うには妙な感じだった。

木の葉が舞い上がり、俺と美春だけを残し周りの風景全てが木の葉で埋めつくされる。まるで世界の全てが木の葉になってしまったようだ。

「きゃっ、なにこの風っ…」

数秒吹いた風はピタリとやみ、木の葉がパラパラと落ちていき元の風景に戻る。

って…あ…あれ？なんか変だぞ？

確かに風景はそのままなのだが…何かが違う。

でも何が違うのか気付けない。この妙な違和感は何だ？

「ねえ…悠斗…なんかさっきと違うない？」

「…え…そうか？…同じだろ」

気のせいだと思いたくて美春の問いにすつとぼける。

「…違うよ…」

「…違うないって」

「違うって、だってさっきあたし達のこと噂してた女の人達いないじゃない」

ああ…確かに…でも人なんて歩けばいなくなるだろ。てかさっきの話聞いてたのか。

「どっか行ったんじゃねえの？」

「だってここ一本道だよ？ダッシュしたっていなくならないよ」

ふむ…確かにこの道は一本道でちよつと入れそうな道もなければお店もない。

正確に言えば、犬猫くらいなら通れそうなのはあるけどな。

人間がわざわざあんなとこ通って行こうとは思わないだろう。

「ほら、それにそこ！」

美春はすぐそこにある家の扉を指差す。

「あそこで寝てた猫ちゃん！いなくなってる！」

って、いやいやや、猫は人間より普通にいなくなるだろ。俺が猫でもさっきの風はビビッて逃げるって。

「気にしすぎだって」

そう言いながらもさっきから違和感を拭えないのは俺も同じだった。

何かチガウ…でも何がチガウ…？

人がいないから…？そうなのか？

「とりあえず、ここで立ち往生してもしょうがないし、行くぜ」

なんだか気味の悪いこの場を早く離れたくてさっさと歩きだす。

「あ、ちよつと待つてよ！」  
後から美春もあわててついでくる。

しばらく歩くと、だんだん美春の言いたかった事が見えてきた。  
本当に、誰もいない。

誰かにすれ違うこともない。猫の子一匹いない。

あまりに静かすぎるこの空間が薄気味悪い。

「ねえ、悠斗、やっぱり誰もいないよ。おかしくない？」

「うん…さすがに…ちよつと変…？かな？」

おろおろする美春にへタレな姿を見せるわけにはいかないと思い、  
内心ザワザワする気持ちを抑え頼れる男ぶりを見せる。

「でも大丈夫だって。俺がついてるし！」

「え？ああ、うん、そう？それよりちよつとあそこの公園見て？」

…軽く流された…

シヨックを受けながらも目の前にある公園へと足を伸ばす。

その公園は広く一般的な公園で、いつも昼間なんかはチビっこや  
ら近所の奥様方、ワノコの散歩してるじいさんやらばあさんやらが  
のほほんと過ごしている。だが、不思議な事にここにも誰もいない。  
さすがに、ちよつと変だ。

公園の中はというと、右手前には滑り台や砂場があり、左手前には  
シーソーや鉄棒、中央には噴水、ベンチがいくつもあつたつて  
普通の公園だ。

そして一番奥には広い…森…？えつと…森なんてあつたつけ？

「はー…しばらく見ない内に公園の奥に広い森ができましたねえ…」  
「バカ！なんで数日で公園の奥に森なんて出来るのよ！」  
そりゃそつだ。

毎日通つていて、わざわざこの公園に寄つたり気にしたりなんて

ことはないが…森があつた記憶はない。いくらなんでも急にこんな森が現れるなんて不自然すぎるだろ。

どうなってるんだ？

「ちよつとだけ行つてみようか…？」

美春がとんでもない事を言い出した。

「おいおい、わけもわからん森に入っていくつて大丈夫なのかよ？」  
「わかんないけど、こんな気味悪いとこにいるよりはマシだと思わない？」

そうかなあ…と思いつつも森へと進む美春を置いていくわけにもいかず、仕方が無く後ろからついていく。

ここからが、俺たちの物語の始まりだった。

## ハジマリ。(後書き)

初作品いかがだったでしょうか？

なんせ初めての作品だっただけに至らない事だらけだったのでは…と不安がいつぱいです。

なるべく新しいもの、と思いつつもなんだか王道ばかりでもう少し頑張りたいと思います。

何かありましたら、どうぞご指摘の程よろしく願います。

## 不思議ナ森

森の中に入ると木々が生い茂り所々に青やらピンクやらの花があった。花の名前はよくわからないが…あまり見たことのない花だ。チューリップっぽいのやらユリっぽいのやら…俺の知っているそれとはちょっと違う気がするが似たような感じだ。

「この花…キレイだね。こんな花あったっけ？」

美春も少し気になるようだ。

その一本をポキンと折り美春に差し出す。

「あ…ありがとう」

美春が手を伸ばしたその時、薄いブルーがかったそのユリのような花は一瞬ポウツと光り、瞬間に枯れてしまった。

「え？うそ…こんなことってあるの？」

俺と美春は顔を見合わせ、驚く。

「なんか、色々変なことだな…」

言わなくてもわかるようなことを思わず口にする。

「やっぱり引き返そうか？」

だが、来た道がどっちだかわからない。

そんなに歩いてはいないはずなのだがもうすでに後ろは見えなくなっているのだ。

少し歩いただけで迷子になってしまったのか。

「ま、まあ、全ての道はローマに通じてるって言うしな！真っ直ぐ進めばどっかの家の前に出るだろ！」

不安そうにする美春の手を取りずんと前だと思われる方向へと進む。

こんな時でもドサクサまぎれに握った手が柔らかくてドキドキしてしまう。

そんなに都会とも田舎とも言えない俺たちの住む町に突如あらわ

れた森。そんな広いとは思えないのだが…時計の針を見るともう1時間は歩いている計算になる。

「いい加減疲れてきたね…ちょっと休もうか？」

そう言っつて美春はハンカチを出して少し大きめの石の上に敷き、その上に座る。

ほ…女の子っつて汚れない為に色々考えてるんだな。

「悠斗も」

そう言っつてチラシみたいなのを取り出し自分の隣に敷く。

「えーつと…何々？ジャニーズ「台風」CD新発売…つてこれ今日じゃん！」

なんと！美春も実はサボっつてCD買いに行くつもりだったのか！！

「い、いや！悠斗と違っつてちゃんと学校帰りに行く予定だったんだよ！？別にこのためにサボっつたわけじゃないんだから！」

くそ、人のこと言えないじゃないか！

しかし、そうやっつて騒いでいたら少し空気が変わったような気がした。

うん、やっぱり俺らはこうやっつて小突きあいしてるくらいじゃないとな。

「あ、お茶もあるけど飲む？」

「お、サンキュー」

差し出されたお茶は開封済み、これっつて関節キツスか…縦笛舐め回す小学生の気持ち少しわかった。

だが俺はぐっつとこらえ普通に飲む。

「お菓子もあるよ？」

女の子の鞆っつてドラ もんかといいたくなる程なんでも入ってるんだな。

しかし歩きつかれた体には飲み物とお菓子が最高にありがたい。

もつとゆっくり休みたいところだが、そうもいかない。この季節は夕暮れがとて早いのだ。急いで森を抜けなければ冗談抜きで夜になっつてしまふ。

「よし、美春のおかげで元気も回復したし目指すか、山田さん家！」  
俺は元気よく立ち上がり山田さん（仮）の家の方向だと思われる  
方に指をさす。

「ぶつ、誰よ、山田さん」

苦笑する美春の手を取り更に奥へと進む。

もう手を繋ぐのも慣れてきた頃、少し雰囲気が変わってきたよう  
な気がする。

風の…臭いがする…これは…

「なんか、秋なのに夏みたいな空気ね」

最初に切り出したのは美春だった。

そう、なぜか夏の爽やかさがあるのだ。

そして、俺たちの先には光が見える。

「お？出口じゃないか？やっぱり山田さん家はあったんだよ」

もう、夏の空気の事などどうでもいい。

やっと森から抜けれる安堵からどつと疲れが押し寄せる。

ああ、もう早く家帰って寝たい。

そう思いながら森を抜ける。

「…あれ…？」

「…うそ…」

二人同時にポロリとこぼれる。

森を抜けるとそこには高台の上。眼下には知らない土地が広がっ  
ていた。

広大な緑の絨毯、そこに点在する民家。だがその民家は俺たちの

よく知る日本住宅ではない。どちらかというところ若草物語にでも出てきそうなイメージだ。

そしてもっと先には町らしきものが見える。

それも俺たちの知るような町並みではなく、ロールプレイングゲーム RPGの世界で見れないような建物ばかりである。

「えっと…これは…どういうこと？」

いまいち飲み込めなくて美春に問いかける。

もちろん、美春だってそんなこと知るわけない。

「…私たち、日本にいたんだよね…？」

俺たちはそのまましばらく呆然と立ち尽くした。

「も、戻るか？」

あまりに非現実的すぎて受け入れられない俺はさっき来た森へ引き返そうとする。

その時、袖をくんと引っ張られる！

「私…あの森…もどりたくない…」

「え、でも、ここ山田さん家にはちよつと見えないんだけど…」

袖を引っ張っていた手を離し今度は両手で手を握ってきた。

「あの森…なんか気持ち悪いの。ね？お願い、きつとあそこの町に行けば誰かに会えるよ？」

すこし潤んだ瞳でそんな事言われたら…男としてはそのお願い却下するわけにはいかないだろ！？

女の子が怖がってる森をわざわざ行ってどうする！

ちよつと変なところ出たけど大丈夫！誰かに道を聞かさ！

そう思いつつも、さっきまで俺たちがいた気味の悪い無人の道路や公園を思い出す。

しかしブルブルと首を振って否定する。

さっき森を抜けるあたりで空気が変わったんだ。

さっきまでの気味悪い違和感とは違う、もう少しスカッとした感

じだった。うん、大丈夫！

自分を少しだけ奮い立たせ、俺と美春は手をつなぎ町を目指すことにした。

## 魔ノ住マウ森

ずーん、ぐらぐらぐら...

最近やたらと地震が多い。

この風の国ミトラルでは地震なんて年に一度もあるかないかだ。それがこここのところ毎日地震が続いている。

風の神殿では巫女であるイシュカが怪訝そうに窓の外を眺めていた。

(風が…騒いでいる...)

ミトラルは風の国と言うだけあり、年中風が吹いている。その風はいつもそよ風で気持ちのいいものだった。

それが今日はやたら騒がしく感じる。

他の神官達は気がつかないだろう。

それは風の巫女であるイシュカだけが感じ取れる風の『声』である。

(風よ…何を騒いでいるの?)

イシュカは精神を集中させ風に問い掛ける。

だが、それへの返答はない。

イシュカにとっては語り掛けても返答がないことが不思議でならなかった。

(いつもと感じが違う...)

その時、いきなりずんっという音と共にとてつもない重力が体にのしかかる。

「な、何？」

神官達は右往左往しながら大声を上げ、急に神殿の中がバタバタし始める。

「な、何事だ!？」

「観測班、何をしている!？」

「西の森より異常な歪みが観測されました!！」

…周りの神官達がうるさ過ぎて風の音が全く聞こえない…いや、違う。

周りのせいではない…。

「風が…止んだ…」

あり得ない…このミトラルにおいては風が止むなんてあり得ないのだ。懸命に風の声に耳を傾けるが何度耳を澄ましても何も聞こえない。

「イシユカ様！」

神官の一人が声を荒立てて走ってくる。

「何事ですか？」

「それが…西の森に歪みが発生したようで…その…突如おかしな空間が生まれたと…」

「おかしな…空間…?」

急いで窓の外へ顔を出し西の森への方を見る。

なるほど、確かにそれはおかしな空間としかいい様がなかった。

森の中央部の空気が歪み、ユラユラと塵気楼のように揺らいでいる。

そして森の中がくりぬいたかの様に中心部だけ木々がなくなっているのだ。

風が止んだのはアレのせい…？

「あれはどういう事ですか？」

「わかりません、何せこのような事は初めてでして…現在調査に向かわせております」

西の森は魔が住まう森と言われている。

ゆえに立ち入りを許可されていない区域になっている。

(まさか…ね…)

イシュカは神殿に収められている文献をだいぶ読んだはずだ。だがここ数百年での歴史で西の森に関するおかしな話はなかったのだ。

魔が住まうという話も半信半疑な者が殆どではないだろうか。

イシュカも勿論、魔の者など見たことがないので、神聖な何かがあるか、国の重大な何かがあるかで立ち入り禁止なのだろうと思っっていたのだ。

そう言えば興味本位で近づいた者もいるらしいが、野獣が放たれているらしく入り口付近で大怪我をして逃げ帰って来たらしい。

「魔の住まう森…か…」

イシュカは独り言のように呟く。

「は…？イシュカ様何と…？」

神官が尋ねてくる。

「西の森は魔の住まう森…と」

ミトラルに住む者なら誰でも知っている事だ。

「はあ…では魔物が何かし始めたのでしょうか…」

「…そう…ね…」

イシユカは不安げに西の森を見つめ続けていた。

## 究極ノ選択

「さて、どうしたもんか」

俺は腕を組み悩む。

そう、あの町を指すと決めたところまでがいい。

しかし、どうやってこの高台を降りるべきか。

階段があるわけでもない、ましてや飛び降りて無事でいられる自信なんてあるわけない。

選択肢としては、

1、丈夫そうな蔓を探してきて編みこみ、それを伝って降りる。

2、決死覚悟で飛び降りる。

3、誰かが来るまで待つ。

4、緩やかな傾斜を探す。

うむむ…どうだろうか？

2と3は自分で提案しておいて何だが、無いな…。

飛び降りなんて、さっきも言ったが決死の覚悟とかそんな問題じゃない。

第一、一体何メートルあるんだ？確か学校の屋上から下を眺めた時もこの位あった気がするぞ？果てしなく高いとまでは言わないが、ちよっと飛び降りてみると言われて、はいそうですか、と言えるような高さではない。運がよくて骨折、運が悪ければ…考えたくない

な…。

3 だってまあ、安全面で言えば無しではない。だが、ここから見た感じ、この中心部はあの町だろう。

所々に家があるっていつても、町には行けどもこんな外れの森に人が来るとは思えない。人が来るのを待っていたら日が暮れるところの話じゃない。

ところがどうだろう？

1 …はだいぶ使える手だと思う。ほら、よく映画とかであるじゃないか。

蔓を編んだとかシーツを編んだとか！

なかなかの上等手段だぜ！

だが、ちよつと待て。決断を急ぐな。

4 の可能性も試算してみよう。

さて、傾斜を探すといつても、どこに行けばいいのやら。

森の中へ戻るのはイヤだと言っしな。

端に沿って歩けば何か見つかるか…。

「うーん、蔓を使うべきか傾斜を探すべきか…」

「は？蔓？」

「あ、うん、ここどうやって降りようかなくなって考えてたんだけど…蔓を編みこんでそれを伝って降りると、降りれそうな斜面を探すとどつちがいいかって…」

美春は、然も「何言ってるの？」と言いたげな顔をしている。

「悠斗…」

「なんだ？」

「あんた…バカでしょ」

「!!!?」

めちゃくちゃ悩んだのにバカ呼ばわりされた!!

「あのねえ、キミはゲームだの映画だのの見すぎ! 蔓を編んでそれに人がぶら下がるくらいって、ちよつとやそつとの蔓じゃダメでしょ!」

ガーン…せつかくい手だと思ったのに…。

「でも、確かにここを降りるのは厳しそうね。後者の”傾斜を探す”には同意かな?」

良かった…受け入れてもらえた…。

さて、ここで一つ問題がある。

見た感じ、開けた部分というのはここだけの様だ。

傾斜を探すにしても、若干は森に戻らなければならぬだろう。

美春は了承してくれるだろうか…。

「さて、立ち往生しててもしょうがないものね。傾斜を探すにしても…やっぱりあの森入らないといけないのね…」

俺が言うより先に美春すでに森の方を向いていた。

「うん…日が暮れる前に急ごうか」

「そうね」

短く返事をする。美春は近くの棒を手に取り高々と掲げる。

「よし! いざ行かん!」

中々に気合が入っているようである。勇ましい事だ。

でも元気が戻ったようで良かった。

俺たちはまた手を繋ぎながら少しだけ森の中へ入ることにする。

この後、やっぱり蔓を使えば良かったと思う出来事が待ち受けているとは知らずに…。

## 町ヲ目指シテ

さて、何だかんだですでに時計の針はもうすぐ16時を指そうと  
している。

この時期は16時を過ぎた辺りから暗くなりはじめなのだ。

一人暮らしの俺はともかく、美春は早く帰してやらないと親御さ  
んがきつと心配するだろう。

急がなくてはいけない。

最悪：町でタクシーでも捕まえよう…。

少しだけ森へ入り、他の道がないか探す。

しかし道らしき道はないようなので、右手側に町がチラチラ見え  
るよう、反時計回りに歩きます。

美春はさつき手に入れたばかりの棒で周りの草を掻き分けながら  
歩いてきた。

もう更に30分近く歩き、ようやく降りれそうな斜面が見えてき  
た。

それを見て余裕が出てきたのか鼻歌なんか歌っている。

「ふんふんふん」

「何やら…ご機嫌ですな、姫」

「うん、まあ、たまには小学生の気分に戻ってこんな冒険も楽し  
いよね」

冒険：そんな気分なのか…。

いざとなった時、女は強いつて本当なんだな。

引きこもりな俺は早く家帰ってゲームして寝たいわ。

そんな思考を読み取られたのか握った俺の手を更に強く握りしめ  
る。

「むほっ！すんません！楽しいですっ！」  
思わず謝ってしまった。

「しっ！静かにして！」

美春は立ち止まり口に人差し指を当てる。  
どうやら俺の思考は関係なかったようだ。

「えっと…美春…？」

恐る恐る声をかけると、きつと睨まれた。

「何か…聞こえない？」

…かさっ…かさっ…さわわ…さわさわわ…

…風…の音のことが…？

しかし不思議な風音だ。何というか…まるで歌うような、語るような、そんな感じの音だ。

「風の音しかしないけど？」

またまたキツと睨まれる。

「何か…いるよ…」

美春が棒を構える。

そう言えば美春は剣術とか護身術とか…なんかそんな事もしているらしい。

なかなか立ち方がそれっぽい。

などと関心したその瞬間、茂みから俺に目がけて何かが飛び出してくる！

「うわあっ！」

しかし俺に食いかかるよりも早く美春がそれに棒を振り上げた。

「ギャン！」

あれは…犬！？

いや、犬にしてはちょっとデカ過ぎる！狼！？

でも日本に狼なんているのか!?

その狼はギラギラした目で俺達を見る。

マジかよ…俺達エサ!?

美春は真剣な顔で狼と対峙する。

じりじりと間合いを詰めてくる狼。

きつと久しぶりのエサなのだろう…口元から涎が垂れているよう  
だ。

狙いを定めた狼が美春へ飛び掛かる!

「やああっ!!」

美春も棒を振りかざしたその時、何か聞こえたような気がした。

…キヲ…ツケ…ナサイ…

「え…?」

キヲ…ツケ…ナサイ…?

気をつけなさい…?

誰だ?

そう思い後ろを見た瞬間、背後から美春日がけて飛び掛かるもつ

一匹の狼がいた!

しまった!!!

「美春!!!!!!危ないっ!!!!!!」

俺は思い切り手を伸ばした。

届くはずなどないのに…。

その瞬間、信じられない事が起きた。

俺の伸ばした手から…剣…？

いや、微妙に違うか…剣らしき緑に光る刃が現れ、美春に飛び掛かっていた狼へと命中していた。

はあはあと息を切らし目の前にいた狼をやっつけた美春は俺の顔を見るなりへたり込んだ。

「はあっ、はあっ…ゆう…と…今の…何…？」

俺だつて聞きたいくらいだ！

「わ…わかんない…なんか…急に…出た…」

「あ、あははは…」

わけもわからず二人で笑う。

しかしその笑いはなんとなく乾いた笑いだった。

「疲れすぎて、幻覚でもみえたかなっ？」

平静を取り戻そうとする美春だが、倒れる狼の切り傷をみると、とても「幻覚でした」では済まされないものがある。

とりあえず俺たちは追及しないことにして斜面を下る事にした。

## 魔ノ使イ

「……」  
「……」

無言が…つらい…

斜面を下るとそこには草原が広がっていた。

「はあ… やつと地上に出た、つて感じがするね」

無言を破ったのは美春だった。

「一応… さつきからずっと地上を歩いているわけだがな…」  
とりあえず突っ込んでみる。

それにしても、どうも様子がおかしい。

さつきからとても不思議なのだが… もう日が暮れてきてもいい頃なのにまだ日が暮れない。

むしろ、まだお昼だっけ？ と言いたくなるほど日が高い。

それに違和感を覚えたのはどうやら美春も同じだったようだ。

二人でボーっと空を見上げる。

「ねえ、今何時だっけ？」

「うん…と」

時計を見ようと顔を下げたその時、目の前に知らない人たちが数人近づいてくるのがみえた。

しかし、変な格好をしている。

鎧を纏った人が5人、ローブを纏った人が3人… 馬に乗っている…。

えっと…？ 何コレ？ 何かの撮影…？

なるほど。確かに撮影だと思えばこの日本離れたセットにも領

ける。

しかしなかなか金のかかった撮影である。

ハリウッド映画並だ。いや？もしかすると本当にハリウッドなのか？

けど、そんな撮影の話なんて町内会の回覧板で回ってきていたかどうか…？

「おい！お前たち！そこで何をしている！！」

撮影の邪魔をしたのかと思いい咄嗟に謝る。

「ああ、すみません！撮影の邪魔でしたか」

中でも一際高価そうな鎧を着た一人がすらっと剣を抜いて近づくと

おお、この人が將軍役か？…衣装、金かかっているな…偽者とはいえカツコイイな。

「何を言っている？」

鎧の人3人とローブの人は俺たちを囲み、もう2人の鎧の人はさつき俺たちが来た方向へと向かう。

何かの様子を伺っているのだろうか。

「えっと…俺たち、何かしました？」

そう問いかけた瞬間、森から馬が走ってくる音が聞こえる。

「トニトルス様！！」

「どうした」

俺たちは訳がわからずボヤーンとしてしているとローブの人が將軍役の人に近づき何やら耳打ちをする。

その様子を黙って見ていた美春はまた真剣な顔つきになってきた。

「悠斗…気をつけて…」

美春が相手には聞こえぬようにこそつと話す。

気をつける…って何を…？

聞こうとしたその時、剣を俺に向けられる。

「お前…魔の使いか…？」

意味がわからなかった。

「え？なんですか？…えっと、この剣かっこいいですね、でも向けられるのはちよっと冗談厳しいですよ」

そう言っつてその剣に触れようと手を上げると、美春にその手をパシッと？まれた。

「美春…？」

美春は真剣な眼差しで將軍役の人を見つめている。

そしてボソつと言った。

「……………その剣……………本物だよ……………」

背筋に冷たいものが流れた。

「それに…この人、マジだよ……………」

え…？それっつてどういう意味…？撮影じゃないのか…？

將軍はもう一度同じ問いかけをしてくる。

「お前、魔の使いか？」

「え、いや、すみません、よく飲み込めないんですけど……………」 マノツ

カイ” っつて何ですか？」

暫く沈黙が流れる。

しかし俺の目の前に向けられた”本物の剣”は仕舞われることはない。

沈黙を破つたのはまたしても美春だった。

「私たち、道に迷ったんです。ここは、どこですか？」

將軍は俺から目を逸らし今度は美春を見つめる。

「道に迷った？お前たちはあの森から来たのではないのか？」

「確かに私たちはあの森から来ました。でも、だからといってあなた方に剣を向けられる謂れはありません！」

…ヘタレな俺と違い、美春はなかなかの男前だ…。

「……あの森は、魔の住まう森と言われている。あそこから来たのならば、お前たちは魔の使いであろう。………捕らえよ」  
そう言う俺と俺と美春は背後から腕を？まね拘束される。  
おいおいおい！  
一体どうなってるんだ！？

本物の剣、魔のナンチャラ…もうわけわかんねーぜ！  
いいから早く俺たちを家に帰してくれー！！

## 魔ノ力持ツ者（前書き）

結構自分ではハイペースに書いてるつもりなりん太郎です。  
一気に7話目です。

この調子でバンバン書きたいです。

## 魔ノ力持ツ者

俺と美春は馬に乗せられて町へと向かっていた。

果てしなく遠いように感じた町は、あつという間に着いてしまった…というか、連行…？

町の中は観光に來たのであればとても楽しそうな町だ。

遠くから見たときよりもずっと洒落ていて、草原の中に佇む民家とはえらい違いだ。建物はどこかヨーロッパ風な建物が多いだろうか。

花屋やレストラン、洋品店に本屋のようなものがあるのは看板のイラストから見て取れる。

町の中心には…城？本格的なファンタジー映画だな…とまだ映画である線を拭えないでいる俺に対し、美春は常にピリピリした表情をしている。

さて、その城の隣には…教会…みたいなもんか？

なるほど、ここは結構都会なようだ。

「トニトルス様ご帰還致しました！」

番兵のような人が叫ぶと城の門が開けられる。

中に通されるとそこには町の中にどれだけ広大な土地を構えるのだと思うような広場。綺麗に整えられた芝生が一面を覆い、城壁の周りを木々や花が彩る。

広場の中央には噴水まであり、なんだかメルヘンな気分になる。

こんなメルヘンな場所、女の子なら大喜びなはずなのだが…相変わらず美春は張り詰めた表情だ。

と、噴水まで到達する前にトニトルスと呼ばれた男は立ち止まり、俺たちを見る。

「森で…ウルフが倒れていたそうだな、あれはお前たちがやったのか？」

返答に困る俺を待たずに美春が返答をする。

「そうよ」

ジロリと美春を睨みつけるトニトルス。

「ほう…お前がやったのか…？」

「…そうよ」

少しだけの間を置き、美春が返事をする。

「そうか、それではお前が魔の使いか」

そう言々と美春に剣を向ける。

「ちよっ…！待って！」

思わず大声を上げる。

「いや、俺だ…」

なんだかわからんが、なんとなくイヤな予感がして美春を庇う。

まあ、それに、実質1匹は俺がやった…？たぶん…。

「ウルフは、二匹いたそうだな」

俺と美春は同時に頷く。

「一匹は、殴られたような、もう一匹は、刃で貫かれたような跡だったと聞く。殴られた方は…おまえであろう？」

美春の方を睨んだまま話す。

「お前は棒を持っていたようだからな。…しかし、もう一匹はどうか？見たところお前たちは棒切れ以外に刃を持っていたとは思えぬ。ウルフの周辺にもそのようなものは無かった、と聞くしな」

そりゃそうだ…だってその”刃で貫かれたような跡”っていうのは、まさしく”俺から出た刃”なのだから武器として持ち合わせているわけがない。

第一、そんなわけのわからない説明をして信じてもらえるはずがない。

「そのもう1匹は、どうやって倒したのだ？」  
「どうやって…って…。」

俺と美春は互いに顔を見合わせる。

なんと言い訳をしたらいいのかわからず、信じてもらえるとは思っていないが話す事にする。

「えと…なんか…わかんないけど…俺の手から…光みたいなのが…  
…飛び出した？ような？」

そう言った瞬間、トニトルスの平静な表情が一変し、今度は俺に剣を向けられる。

「では、お前が魔の者か！！この男を連れて行け！」

！！！！！！？

え！？なんだなんだ！？

わけがわからないぞ！？どういうこと！？

ピリっと体に何かを感じ、その瞬間より俺はここで一度記憶が途切れる。

なんかよくわからんが…なんか…ヤバ……そうだ……み…は…  
…る……逃げ……

その頃神殿ではイシュカがまた吹き始めた風の声に耳を傾けていた。

一瞬とはいえなぜ風が止んだのか…

(風よ…どうしたの…? 答えて…)

だが、風は答えてはくれない。

「イシュカ様、トニトルス様が西の森で魔の使いらしき者を捕らえたようです」

神官の一人が駆けながら報告に来る。

「捕らえられているのは城ですか?」

「はい、ただいまトニトルス様が牢獄へ連れて行つたと」

「そう、すぐに向かえる神官達を向かわせ、魔力対応重複結界を張つておいてください。すぐに私も向かいます」

そう言うといシュカは祭壇へと向かい、そこへ捧げられている装飾の施された短刀を一本護身用に持ち、風の神に祈りを捧げる。

…やはり…魔が住まうというのは本当だったのね…。

…私に、力をお貸し下さい…。

短く祈るとイシュカは城へと急いだ。

魔ノ力持ツ者（後書き）

7話目、いかがだったでしょうか？

美春はどんどん男前になっていきますね。

悠斗はどんどんヘタレになっていきますね。

しかも相当な天然ですね。

そんな彼がキライじゃないです。

## 牢獄ノ中デ

気がついたときは俺は牢獄のようなところにいた。

えーっと…俺、何したっけ？

さっきのことを思い返す。

ピリっとした感覚の後…そっか、俺、多分気を失ったんだな…

さすがにここまで来ると、映画にしてはちょっとおかしいと思い始める。

そつえば美春はずっと張り詰めた表情してたっけ。鈍感なのは俺だけか？

しかし、俺は牢獄の中とはいえ体に異常は感じられない。俺の事は大丈夫そうだが…美春はどうなっただろうか。

俺と同じに牢獄に入れられてないだろうか…あの男…鋭い目をしていた。痛めつけられてたりしてないだろうか。

薄暗いここは、全体石造りで、ひんやりとした空気があまり気持ちいいと言えない。

牢獄の中には毛布が1枚あるだけ。

鉄格子から通路側の様子を伺う。

人の気配はなく、静寂が俺の周りを覆う。…俺一人だけなのか？  
そう思うと途端に不安になってくる。

「だれか……いませんか…？」

大声を上げるのもちよつと怖いので少しトーンを下げた誰かに呼びかけてみる。

……くす……

微かに、本当に微かに、静寂でなければ聞こえなかったであろうくらい小さく、笑い声が聞こえた気がした。

え…？誰か…いるのか…？

「誰…だ…？」

さっきと同じくらいのトーンで静かに話しかける。

……………くす……………くす……………

まただ。

「誰だよ？」

今度はもう少し大きめの声で話しかける。

だが、今度は何も聞こえない。

「誰かいるんだろ！？」

今度は大声をあげてみた。

誰でもいい。お願いだからこの静寂を破って欲しい。

「私の…気配がわかるとは、なかなかですね」

ふいに女の人が見れた。

「……………」

思わず見とれてしまうほどの超絶美人だ…。

外人か…？

腰まで伸びた銀髪、透けるような白い肌、モデルかと思うようなスタイル…

腰には宝石の散りばめられている短刀、白いローブはさつき俺らを抑えたいやつらのものと違い、装飾も凝っていてなんだか威厳があり、それなりに上位の位置にいる人なのだろうと予測する事がで

きる。

「あんたか？さつき笑っていたのは」

俺の質問に眉を顰める美人の姉ちゃん。

「何を言っているのかわかりません」

あれ…？この人じゃない…？

じゃあさつきの笑い声は誰だ…？

「あなた、魔の力を使ったそうね」

また”魔”かよ…少しうんざりしながら答える。

「”あなた”じゃねえよ、竹井 悠斗！」

「…タケイ、ユート…ト？」

「おうよ、んで、そちらさんは？」

「…」

短い沈黙の後、美人な姉ちゃんは口を開く。

「イシユカ…」

名前からしてやっぱし外人か…。

「それで、タケイユート、あなたはどこからどうやって来たのですか？」

「竹井は別に言わんでいいよ…それ、苗字だし…」

「…そう…なのですか？…では、ユート、私の質問に教えてください。ここには魔の力を封じる結界を張ってあります。あなたが魔の力を使っても無駄ですので抵抗なさらないように…」

「なんだかよくわからんがつまり、俺はその”魔の者”ってやつと勘違いされているのか？」

「俺だつてどうやってここに来たのかわかんねーよ、なんか学校の帰りに公園寄ったら森があつて、そこ入って進んできたらここに来たんだよ。てかここどこよ？」

「何も知らずに来たと言うのですか？」

「だから、そう言ってるだろ」

そんなことより、ここはどこなのか、どうやって帰れるのか早く教えてほしいぜ。

少し考えたあとイシユカは続ける。

「あなたが、魔の力を使ったのは…事実なはずです…。ウルフの…傷口から微かな魔力を感じた…と…そう報告にあります。ですが、私はそれに違和感を覚えてならないのです」

何を言っているのか意味不明だった。でも俺が理解しているかどうかなんていうのはイシユカにとってどうでもいいことだったようだ。

「魔力を持つものであれば、私とその魔力を感じ取れないはずがないのです…あなたからは、それが感じられない…あなたは、何者ですか？」

「俺は…だから、竹井悠斗、17歳、ただの高校生だ」

「高校生…？それはなんと…いう種族ですか？」

「いやいや！この姉ちゃんなんかズレてんぞ？」

「高校つーのは！学校の事だよ！ガツコウくらいわかるだろ？」

「学校…あなたは、学校で魔の力を身につけているのですか？」

「はあ…??？」

もうなんだか話が噛み合っていない気がするぞ？

「いや…そうじゃなくて…とにかく！俺はただの人間だよ。その魔力とか、魔のナントカとか、一切関係ないから！頼むよ、えっと、イシユカ、だっけ？ここから出してくれないかな。早く美春のところに連れてやらないと…あいつきつと泣いてるぜ…」

「美春…というのは、あなたと一緒にいた女の子ですね」

「あ、ああ、知ってるのか？」

「彼女はあなたの護衛ですか？なかなか腕の立つ剣士ですね」

「はあ？剣士…？」

「彼女でしたら、逃げましたよ。兵の剣を奪い、」 ユートを助ける…と言いながら」

…え？

剣を奪い…逃走???

俺が美春を助けるんじゃない？…美春が俺を助けるの!?

めっちゃ俺ダメ男じゃん!

「番兵が門を閉めたままです…城内にはいるでしょうね」

そして続けて呟く

「どうして、こんな時に風の声が聞こえないの…? 声さえ聞こえれば…」

そう呟いた彼女は唇を噛み締める。

風の声が…なんだって？

……………くすくす……………くすつ……………

また、誰かが、笑った。

「ユート…あなたはまだ謎だらけですね。でも、あなたから負の力や魔の力を感じない…いえ…むしろ……………」

イシユカは何かを言いかけたが思いとどまる。

「とにかく、私には、あなたが皆がいう程の者には見えないのです…。まだここからあなたを出すわけにはいかないけれども、あなたの身の安全は保障致しましょう」

「そりゃ、どーも。でもあんたにそんな権限あんのかよ?」

「…私は、風の神殿の巫女です。その中でも、唯一風の声を聞き、風の力を最大に受け継ぐもの…この国では風の力持つ者こそ最高権力に一番近いとされます…本当は、権力など使いたくはないのですが…」

ほほう…なんかよくわからんがとりあえず、すつごく権力者なんだなってことだけはわかった。

こんなとき美春だったらこれだけの情報で色んな事がわかってしまっただろうな。

まあ、その権力者に安全を保障されたのなら安心なのかな…？

「じゃあついでに、美春も安全保障してくれよ」

「…彼女は…わかりません…」

「え！いや、それ困るって！なんで!？」

「事情があろうとも、国の兵に剣を向けたわけですからね。ですが、ユートが望むなら、最善策は取りましよう。」

イシユカはそう言うのと踵を返した。

「また来ます。くれぐれも下手な事はなさらぬよう…」

そう、忠告を残していなくなる。

下手な事ってなんだよ。

結局、ここがどこなのかも分からなかったし。風の神殿に…巫女

…風の声…風の力…最高権力…。

色々と腑に落ちない。

ふと時間が気になり時計を見ると16時20分を指したまま止まっていた。

ウルフとの戦いの時に壊れてしまったのか…。

格子から外を覗くと少しづつ日が傾いて来ているのが見える。

美春…頼むから無事でいてくれ…。

俺は祈る事しかできなかった。

## 女剣士ト、マシユマロ

悠斗…！無事でいて…！！

美春は茂みに隠れながら周りの様子を伺う。

私も、連行されそうになったから思わず兵士に蹴りいれて剣を奪っちゃったけど…これってやっぱりマズイよねえ…。

でも悠斗は気絶させられちゃうし、それに、あいつ…トニトルス…今にも悠斗の首を取りそうだった…。

悠斗は、手から妙なもの出してたけど、本人に自覚なし。いざとなつたとき、もう一度あれを出せと言ってもきつと出せないだろう。

てか…あれ、ほんとに本当なのよね…？あれのおかげで私助かったんだし…。

悠斗は武術とか剣術とか一切やってなさそうだし、私が助けてやらないとマジに殺されちゃうよ！

美春はパンつと自分の顔を叩くと気合を入れた。

「よし！美春、行くよ！」

自分に言い聞かせ、剣を構えると兵たちの前に飛び出る。

「悠斗をどこに連れて行ったのか、教えて頂こうかしら？」

まさか正々堂々と前に出てくるとは思わず兵たちは驚いてあたふたと剣を構える。

「お、お前どこから！」

「いいからさっさと教えてくれないと、痛い目見るよっ！」

刹那！一人の兵の後ろに回りこみ鎧と冑の間に剣を突く。その剣は首にプツンと刺さったところで止められる。

美春は本気である。

「こいつ…剣士か…」

他の兵たちが動揺する。

「早く！悠斗はどこにいるの!？」

首に剣を突き立てられた兵士がカタカタと震えながらあっさり白状する。

「城内の牢獄だ…」

「お利口さんね」

美春は兵を蹴り飛ばすとその俊敏な体で城へ走り出す。

呆然としていた兵たちが、はっと我に返る。

「い、いかん、逃がすな！追え！」

…いつもより…体が軽い…

そう、いくらスポーツ万能で武術に剣術を習っているとはいえ、ここまで体が軽いなんて信じられないくらいだった。

そういうえば、森を抜けてから、やたら体が軽かった気がする。

城の前まで来て近くの茂みに隠れると美春は様子を伺う。  
さて、ここまで来たのはいい。でもどうやって中に入るう…。

その時、後ろからガサガサと茂みを分け入ってくる音が聞こえる。

し、しまった!!見つかった!!

バツッと振り返るとそこには、、、何も、いない…?

「あ、あれ？」

思わず声が漏れる。

すると、

「にゅー」

足元から何か聞こえた。

ふと、目を落とすとそこには両手の平サイズよりは少し大きいくらいの妙な生物…。

見た目は、真っ白でふわふわモフモフしたマシユマロ？それに申し訳程度の耳がちょこん。尻尾はないようだ。

まん丸のお目は見えているものの、鼻や口は毛に覆われてどこにあるのかよくわからない。手足はついているようだが…相当短い。

そして、二足歩行！

これ、なんて生物…？

でも、めっちゃカワイイ！！！！

あまりのかわいさにクラクラしつつ、小声で話しかける。

「ごめんね、今キミに構ってる暇ないんだ。あのバカを助けなきゃ

…」

覚悟を決めて強行突破しようとして体を上げた瞬間、

「にゅっ！！」

そう鳴くと美春のスカートにぶら下がる妙な生物。

「うんと、困ったな…」

そう言ってもう一度しゃがみ込むとその生物はスカートをくいくい引っ張る。

「遊んで欲しいの？」

そういうとその生物はふるふると首（体？）を振るわせる。

この子、私の言ってる事、理解してる…？

光る花、ウルフ、悠斗の手から出た光、日本離れたこの場所、謎の生物。

もう普通の事態でない事を美春はなんとなく感じていた。

もはや人の言葉が理解できる生物がいようと驚くことはなかった。

「じゃあ何かしら？マシユマロちゃんが悠斗の場所まで案内してく

れる？」

まさかね、と思いつつも一番期待したいことを聞いてみる。  
すると、その生物はコクコクと頷く。

「え？ホント!？」

「こゆ！」

不思議な生物は短く返事をする。城とは全く正反対へと走り出す。  
慌ててそれを追いかける。

マシユマロが連れてきた場所は色とりどりの花に囲まれた中に佇む  
これは墓石だろうか。

字は、英語でも、ましてや日本語でもないようだ。

「なぜ、こんな外れにひとつだけあるのかしら…」

「にゅーにゅー」

見ると墓石の裏側に向かってしきりに鳴いている。

裏側にまわると墓石と地面の間に若干の隙間が見える。

「なるほど、城にはいくつもの地下通路があるって言うものね」

そう言つと墓石をゴリゴリと動かす。

「よいしょっ…！ん…結構、重い…かもっ…！」

足元では役に立っているのか、いないのか微妙なマシユマロが一緒  
になって押している。

ゴトンという音がして墓石の下に隠された地下通路が顔を出す。

「はあ、はあ、やった」

地下通路に下りると真っ暗で何も見えない。

「うー…鞆の中にペンライトが入ってるんだけどな…連れてこられ  
る時に全部取られちゃったしなあ」

そう、今持っているものは兵から奪った剣、ポケットに入っている  
キャンディ、胸ポケットに入っていた携帯くらいだ。

「携帯…これは使えるか」

携帯を開くとまあまあ明るい。電波は、当然ながら入っていない。

「にゅー！」

「あ、待ってよ、マシユマロっ！」

通り慣れているのかマシユマロはいつきに駆け出す。

慌ててその後ろを追いかける。

少し歩いてみてだいぶ目が慣れてきた。この地下通路は真っ暗だがあまり陰気臭くなかった。

もしかしたら意外と頻繁に使われているのかもしれない。だとすると誰かに行くわす可能性だってあるわけだ。

美春は剣をぎゅっと握り締めながら慎重に歩く。

「ねえマシユマロ、まだかな？」

「にゅー」

と、ふいにマシユマロの足が止まる。

「マシユマロ…？」

カッーン、カッーン……

誰かが歩いてくる音が聞こえる。

ヤバイ、見つかる！光っ！！

暗闇の中で光など、私はここにいますよ、と教えているようなものだ。

慌てて携帯を閉じて剣を構える。

カッーン、カッーン、カッーン。

足音が止まる。

その時タイミング悪くマシユマロが鳴く。しかも、とても大きな声

で。

「にゅーっ！」

サイアク…！

「ジーニ…？」

女の人の声だ。

「にゅー」

マシユマロと、女の人が会話をしている…？

「そう、彼女を連れて来たのはあなたなのね」

「にゅー」

何が起きているのか、何を話しているのか…きっと私のことはバレている。

剣を握る手に力が入る。

「ミハル…ね？」

「え？」

なぜ、私の名前を…？

女の人は更に近づいてくる。

「風が…やつと答えてくれたのです。地下通路からミハルが来る…とだけ」

そう言いながら目の前まで近づいてくる。

「あなたがジーニを連れてくるとは、意外でしたが。いえ、ジーニがあなたを導いたのでしょうか」

「にゅー」

「そう、ジーニがあなたを…」

「えっと、ジーニていうのは、そのマシユマロのこと？」

美春は観念し携帯をカチリと開く。

その光で照らされた女性は、よく見えないけど美春よりは少しだけ年上なのだろうか。

…銀髪…きれい…

「私の名前、どうして知っているのかしら？」

「ユートが、あなたの名前を呼んでいました」

「！！悠斗は無事なの？」

「ええ…、案内してあげましょう」

あまりにあっさりすぎるので逆に怪しく感じる。

畏かもしれない。

「…いいの？」

それでも藁をも掴む思いだったのだ。

畏なら畏でその時は腕に物を言わせるしかない。

「あなたはジーニに連れて来られたようですからね」

「マシユマロが、どうかしたというの？」

「ジーニは、風の精霊が具現化した姿です。巫女たる私以外に風と語り合えるとすればこのジーニだけ。その精霊があなたを連れてきたのならば、あなたは風と何らかの関係のある方…私には戦う理由がありません」

「ふーん…とりあえず、敵ではないようね。えっと…」

「イシユカ…と申します」

「よろしく、イシユカさん」

敵ではない、と認識はしたものの油断は出来ない。

美春は剣を下ろしたものの更に強く握り締め、イシユカ、ジーニと共に先を急ぐのであった。

## 記憶

「お母さん！風が…泣いてるよ？」

「あらあら、泣いてるなんて不思議な事を言うのね」

これは…5歳の頃の俺か…？

「この子は感性豊かなのかしら？」

何だかよくわからないがお母さんが笑ってくれて…それで嬉しくなつて…俺意味不明なこと言い出したんだっけ…？

「お母さん、風がね、一緒に遊んでくれるんだ！」

「お母さん、風が僕の事いじめたヤツをやっつけてくれたよ！」

「お母さん、隣の家のおじいちゃん今日死ぬみたいだよ？風が教えてくれたの！」

「お母さん！」「お母さん！」「お母さん…！」

パシーン…！

小学二年生の俺は母親に打たれる。

「風が風がつて気持ち悪い子…！」

子供ながらにきつと言つてはいけない事だったのだと知る…。

「その”風”のせいで近所から変な目で見られているのよ！あなたなんて拾つてこなければ良かった…！」

今まで、本当の家族だと信じて疑わなかったのに、その時初めて



そんなマイナス思考が頭をよぎる。

風…の声…そういえば、イシユカもそんな事を言っていたな。  
風の声って、どんなだったけ…

目を閉じて五感を澄ましてみる。

さわ…さわ…さわ…

風の音がする…でも、言葉とは、ちよつと取れないな。  
子どもの頃はどんなだったか。  
たしか…

…ゆつと…ゆつと…いつしよに…あそびましょ…

だいぶ、ハッキリと聞こえたような…そんな気がする。  
もっと、全神経を耳に、心に、風を肌で感じて…

…くす…くす…

この笑い声、さつきも聞いたきがするぞ。

「お前…風…か？」

問いかけてみる。

…ふふふ…ゆつと…おかえり…

やっぱり！今までの笑い声は風の声だったのか！

「おかえりつて、どういう意味だよ！」

そう叫んだ瞬間、風の気配が消える。

そこに残るのは、鉄格子の間から吹くただの隙間風。

カタン。タッタッタッタ。

誰かが駆けて来る音がする。

その音の方に目を向けると美春が走ってくるのが見えた。

「悠斗！！！！」

「！！美春！！」

鉄格子越しにお互い手を取り合う。

「良かった…悠斗、無事で良かった…」

「美春こそ…無事でよかった。それより、よくここまで来れたな」

「うん…イシユカさんと、マシユマロのおかげだね」

美春の後ろからイシユカと…へんな動物が歩いてくる。

「イシユカ…と、なんだ…それ」

「にゅー」

「あつと…マシユマロ！風の、精霊…？らしいよ？」

「ふーん…」

俺はその風の精霊とやらのほっぺをつんつんする。

「にゅー、ゆうとやめれ〜」

！！！！

「喋った！！」

「は？」

「え…今何と…？」

美春とイシユカは変な顔で俺を見る。

「こいつ、今人語喋ったよな！？」

「何言ってるの？迷惑そうに『にゅーにゅーにゅー』言ってるだけじゃな

い

え…？だつて今こいつ…やめれー って言ったぞ？

俺の耳がおかしくなったのかと思い、今度はちょっとしか出ていないこいつの耳を引っ張る。

「にゅー！やめやめやめれー！！」

！！！！

「ほら！やつぱり喋った！」

美春はバカにしたような目で俺を見る。

「あんた、頭おかしくなった？」

「えええ！？こんなにハッキリ喋ってるのにか！？」

イシユカはそんな俺を見て驚いているようだ。

「ユート、まさかあなた…ジー二の言葉がわかるのですか…？」

「え、分かるも何も…普通に喋ってるじゃないか」

「にゅー、ゆつと、ジー二のことは、ゆつとしか、わからないにゅー」

え…？？どういう意味だ…？

「ユート、あなた…魔の者とは少し違うようだと思いますが…まさか、そんなことが…」

その時、ずーんと重力が押し掛かるような感覚を覚える。

「うお！なんだこれ！」

「またですか…」

イシユカは急いで牢の鍵を開ける。

「いいのかよ？」

「ええ、あなたが何者なのか…なんとなくわかってきましたから。私と一緒に来てください」

俺と美春は顔を見合わせる。

俺自身は、自分が何者なのか、さっぱりわからなくなってきた。

変な生物の言葉はわかるわ、風の声は聞こえるわ、手から変なもの出るわ…俺どうなってしまっんだ？

## 兄ト妹

「アシエロト様……」

神官の一人がアシエロトと呼ばれた男に近付き何かを耳打ちする。

「……………そうか…イシユカが……」

「どういたしましょうか」

「とりあえずは良い。好きなようにさせておけ。だが…あまり出すぎた事はしないよう釘を刺しておかねばな」

それだけを聞くと神官は一礼をし、アシエロトの前から姿を消す。アシエロトは一冊の本を開きその一文を読み上げた。

「…風が止むその一時、分れし二つは一つになるであろう……」

「えっと…なんか…扱いがさつきとだいぶ違うような……」

どっぷりと日が暮れてしまった現在、神殿に連れられた悠斗と美春の前には豪華な食事が食べきれない程並べられていた。

「先ほどは失礼致しました…お腹が空きましたでしょう？」

イシユカが言うより早くジーニはすでに食事にかぶりついている。しかし、かわいらしい容姿にそぐわぬ豪快な食べっぷりだ。

「にゅ〜！うまっ！がぶがぶ」

「私達の誤解が解けたようで良かったわ」

そう言いながら美春は食事に手を伸ばす。

とりあえず、俺も負けじと食事へガッツク。

「もぐもぐ、しかし…もぐもぐ…結局…もぐもぐ…ここは…もぐもぐ…どこ？ごっくん」

食べるか喋るかどっちかにしなさい、と美春に睨まれ俺はとりあえず食事に集中することにした。

イシユカはくすりと笑ったあと説明を始める。

「ここは、風の国ミトラルです」

「ミトラル…？」

俺と美春はきよとんとして聞く。

「ええ、ミトラルは風の力を受けて生活をしている国です」

なるほど、そういえば町のあちらこちらに風車らしきものもあつたよな気がする。

イシユカは続けて説明をしてくれる。

「その中でも風の力を操る能力を持つものが風の神殿に住まう事を許されています。私も、そこにいる神官共も、皆風を使うことができます」

曰く、一般の人々は俺たちと変わらない普通の人達、風使いなのが神官や巫女、その中でも色々ランクがあるようだ。

風使いでも”風の声”を聞けるのはイシユカだけだという。

ちなみに、風の声を聞ける者は本来神殿の長である宮司よりも格が上であり、この国においては国を治める王の次に偉いのだとか。

だが、そのイシユカですらジー二の声は聞こえないらしい。

ジー二曰く、

「にゅー、ジー二は風の精霊とか言われて崇められるけど、ホントは全然そんなんじゃないにゅー…仲のいいお友達ではあるけどにゅー」

だそうだ。

そんな俺がなぜジー二の言葉が聞こえ、風の声が聞こえるのか…全くもってなぞだ…。

「そのことなのですが…」

イシュカが何かを言おうとしたその時、扉がバンと開けられる。

そこには長髪の男が立っていた。

「お兄様！」

イシュカは驚いて男の元へ駆ける。

イシュカが兄と呼んだその男は、イシュカと同じ銀髪、腰まである長い髪をしている。

額にはサークレットののようなものはめていて、ローブは白、金の刺繍がこれまた豪勢である。

イシュカに似ているか…というところ少し微妙だが、優しげな印象のイシュカと比べ、切れ長の目が印象的な細身の色男である。

おいおいおい、心なしか美春が紅潮しているように見える…気のせいであってほしい。

「イシュカ、この者達は昏間の騒ぎの元凶ではないのか？」

「お兄様、お聞き下さい。ユート様は風の声を聞き、ジーニの言葉も聞けるようなのです」

「ほう…ジーニに言葉を…だがジーニの言葉は誰も聞いたことがない」

「それは、ユート様が嘘をおっしゃっていると？」

イシュカの兄はこちらを睨みつけ続ける。

「誰もそこまでは言っておらぬ。ただ、この者たちは魔の森からやってきたのだろうか？」

めちやくちや俺たちを疑ってるって感じた。

「それは…そうですが…ジーニがミハルをユート様の元へ案内したのです。ジーニもユート様が風使いだと分かるからこそその行いだっただのではないのでしょうか」

「だが、魔の森でウルフを退治した力…それは魔の力に似たものだったと聞くが？」

「それは誤解です。確かに…我らの力とは多少違いはあるものの、

調査の結果、風の力であることが分かっております」

「…それが本当であるなら、イシュカ、お前よりも力があると言っていることになるな」

そう言うと、俺たちの前に立つ。

「私はイシュカの兄アシエロト、風の神殿の宮司を務めております。現在私には、残念ながらあなた様方の力を垣間見えることは出来ませんが…風の力持つものかどうか…明日、王に謁見なされれば分かる事。その時は改めて歓迎致しましょう。では、失礼」

そう言い残すとアシエロトは踵を返し部屋を出て行く。

「王との、謁見って、王様に会うってことか？」

「まだ言っていないませんでしたね。明日、王と謁見して頂きたい思います」

ほづ…王様…って、ええええええええええええ！??

未だにイマイチ理解できてないのに王様とか話飛びすぎじゃねえか!?

「正確に言えば、姫様に、ですが」

姫様と聞いて俺は身を乗り出す。

「え？姫？それって美人!？」

ぎゅむっ。

その瞬間美春に頬を思いつきりつねられる。

い、痛い…。

「ええ、それはもう、お可愛らしいお方でございます」

イシュカはクスリと微笑むと姫様の話をしてくれる。

「ミトラルの王、ヴォーダ様の第一皇女エルナ様は人の奥に秘めたる風の力を感じる事が出来るお方です。私でも感じ取れぬ程の微量な力でも…」

つまり、その姫様に会って俺が”魔の者”であるのか、”風の者”であるのか確かめるといふ事だな。

結局、まだ完全に信じられていないということなのか。

食事を終えると俺たちは別々の部屋に通される。

俺に用意された部屋はいつも帰る6畳の部屋を4つくらいくっ付けたような広さで、小さなテーブルやシングルサイズのベッド等の家具類が置いてある。これでテレビと冷蔵庫さえあればここで生活できそうだ。

俺はベッドに倒れこむと今日の出来事を振り返る。

結局、分かった事といえば、ここは俺たちの住む世界とは違うということ。

変な力が使えるということ。

美春が俺より強いということ…。

最後のは自分で言っただけなんだが情けなくなってくる。

明日は王様と謁見とか言ってたな。

…色々ありすぎて今日は疲れてしまった…。

これは夢で、目が覚めたら元の世界に戻っていればいいのに…な  
どと考えると俺はそのまま眠りについた。

## 風ノ精霊

チュンチュン…チチチ…

朝…か…。

薄く目を開けるとそこはいつも見慣れている天井ではなかった。  
ここ…どこだっけ？…ああ、そっか…昨日の出来事は夢ではな  
かったのか…。

丁度ベッドから見える窓へ目を向けると、日本でもお馴染みな雀  
…ではなく、青い小鳥が雀の様な声で囀っている。

やはりここは知らない場所なのか、と肩を落としながら寝返りを  
うつ。

むぎゅっ。

え？むぎゅ？

「にゅ〜！！痛い〜！！にゅ〜！！」

！！！！！！

なんと、いつの間にかジーニが俺のベッドに潜り込んでいたのだ。

「うお、ジーニ！！いつの間に！！」

「ヒドイにゅ〜痛いにゅ〜」

思い切り潰してしまったらしく、ジーニは目に大粒の涙を溜めな  
がら訴えかける。

だが、かわいい女の子の涙ならともかく、ジーニの涙というのは  
なんとも笑えるものである。

しかし、ジーニのお陰で鬱屈した気分が拭えた事には素直に感謝  
することにしておく。

「ジーニ、サンキュ」

「にゅ？」

ジーニは何に対してお礼を言われたのか分からないようだが、とりあえず役に立てたことに喜んでいようようで、何やら偉そうに踏ん返り返る。

「にゅ、ところでゆうとは今日エルナに会ったにゅ？」

そう、そう言えばタベそんな事を言っていたな。

風の力を感じ取れるお姫様だ、とかなんとか。

それはつまり、まだ俺の事を完全には信用していないと言う事。

風の力が見えれば味方、見えなければ…敵…？

でも魔の力も見えないとイシユカは言っていた。

「ジーニはそのお姫様に会った事が？」

「にゅ、ジーニはエルナとお友達にゅ」

「えっ、てことは、お姫様もジーニの声が？」

「残念ながらエルナにジーニの声は届かないにゅ…けど、なんとなく言いたい事を感じ取ってるみたいだにゅ」

ふむ、なるほど、やはりジーニの声は俺にしか聞こえないらしい。

「ところでジーニ」

「にゅ？」

「お前、なんで俺達の事助けてくれたんだ？」

「にゅ…それは、ジーニにとこにゅ、シユガーがやってきて、ゆうととミハルを、助けて…って言うからにゅ…」

ジーニは自分にしか分からないような説明をし始める。

「えっ、ちょ、ちょっと待て。シユガーって言うのは誰だ」

「そんな事も知らないのかにゅ！本当の風の精だにゅ！」

って、知らんわ！

てか風の精ってのは確かジー二の事じゃなかったか？

「だから、ジー二は違うにゆ！」

そうか、そうだったな。

しかし人々はジー二の事を風の精だと呼んでいるわけで、でも風の精は他にいて？？

つまり、本当の風の精って言うのは人々には知られていない？

「その通りだにゆ！ ゆうとはバカだけど意外といいところ突いてるにゆ」

バカって言うな！

なんとなく癪なのでジー二の頭をゴキンと殴る。

「イタイにゆ…ジー二は、風の精もみえるし、お話も出来るけどただの風使いには見えないにゆ」。たまに声が聞こえちゃう風使いもいるみたいだけにゆ」

ふむふむ、つまり、イシュカの事だな。

「シュガーはいつも一人ぼっちにゆ、あ、シュガーってというのはジー二が考えてあげた名前にゆ！ 誰にも見えないから誰にも名前を付けてもらえない風の精にジー二が付けてあげたんだにゆ シュガーは、ジー二の大好物にゆ」

そう言っって何を思い描いているのか…口元から涎が垂れている。

名前からして、砂糖…でいいのだろうか…甘党なのか、動物のくせに。

「で、それがジー二とどういう関係が？」

「にゆ、そいでにゆ、風使いが聞く風の声というのはとても弱いものらしいにゆ。つまり、なんていうかにゆ？ 多分こんな感じだろう程度？ ハッキリした声ではないにゆ。それ故に曖昧だったり、何かの影響を受けると途端に聞こえなくなったりするらしく、相当な集中力が必要みたいだにゆ。ところがジー二はバッチリ聞こえちゃうし、バッチリ見えちゃうんだにゆ！ シュガーは年寄りなくせに口リ

ロリなんだにゅ〜」

どうでもいい情報も混じっているような気もするが、とりあえず今はジーニの言葉に耳を傾けることにする。

「そいでにゅ、声の聞こえる風使いというのは数百年に一度しか現れない逸材で、その風使いを除くと風の精の声を聞き、風の精の手足となれるのがジーニだけなんだにゅ。人々は”ジーニの行くところに風の精在り”と噂するようになり、それがいつしか”ジーニが風の精だ”に変わってしまったにゅ〜」

それって、要は勘違いなのか？

「ていうか、お前何歳だよ…そんなに昔から存在しているんか？」

「ジーニはまだ子どもだから人間でいう8歳くらいだにゅ〜。でもジーニ族は長生きだから400年は生きるにゅ〜。ジーニのお祖父ちゃん世代くらいにはジーニが精霊ってことになったんじゃないかにゅ？」

そりゃまた随分長生きだな…。そして随分な勘違いだな。

ジーニとお喋りをしている内に随分な時間を費やしてしまったよ  
うだ。

コンコンというノックと共にドア越しに声をかけられる。

「悠斗！いつまで寝てるの！早く起きなさいよ！」

美春の声だ。

「起きてるよ、今行く」

そう声をかけるとベッドから降り、ドアへと向かう。

その後ろをヒョコヒョコとジーニがついて来る。

そついえばさつき”ジーニ族”と言っていたな。

”ジーニ”というのは名前ではなく種族名だったんだな…。

「おい、ジーニ、お前の名前なんていうんだ？」

「にゅ？ジーンは”ジーン”としか呼ばれたことが無いから名前なんてないにゅ？」

なるほど、名前がない風の精にジーンはきつと自分に重ね合わせ、風の精に名前を付けてあげたのだ。

「……早く行くぞ、マシユマロ」

「にゅ…それ、ミハルがジーンのことを…」

「だから、マシユマロだろ？」

マシユマロはまたまた目に涙を溜める。  
意外と涙もろいやつだ。

「にゅ〜」

俺とマシユマロは元気よく扉を開ける。  
扉の前では美春が待っていてくれた。

「さあ、行くところか」

美春は頷くとマシユマロを抱き上げる。

「マシユマロちゃん、おはよ  
にゅ〜」

マシユマロの嬉しそうな鳴き声が廊下に木霊する。

## 王ノ間

俺たちは今、城の中、それも王の間の扉前に立っている。この扉は一体何メートルあるのだろうか。重厚な扉に圧倒され、途端に不安が襲ってくる。

普通、ゲームであれば王様に会って大歓迎され、俺達は勇者とか言われモテ囃されるはずだ。

だが、これはゲームでもないし、ましてや勇者なんてものでもない。そういう意味では俺なんかよりも余程美春の方が勇者らしいと言えるだろう。

扉の両隣には槍を持った兵が立ち、扉の真前では、あのトニトルスが俺たちを睨みつける。

トニトルスはもとより大柄であるが、こうして立っている姿を見るとそれ以上に大きく見える気がしてしまう。畏縮する俺とは裏腹に、美春は堂々としたもので、トニトルスに負けないくらいの気迫である。

たまらず美春をチラチラと横目で見る。すると俺の視線に気付いたのかこちらを向き柔らかに微笑む。

少し…気が楽になった気がする。

その時、扉が開かれた。

「ユート、ミハル、両名入られよ」

俺と美春は覚悟を決め扉の中に足を踏み入れた。その後ろからはイシュカとアシェロト、そしてトニトルスがついてくる。

俺達は長く敷かれた赤い絨毯の上をゆっくりと前に進んで行く。  
正面には仰々しい椅子が置かれ、そこに鎮座しているのが…きつ  
と王様であろう。

その隣にドレスを着て立っている女の子…彼女が皇女エルナだろ  
うか。年の頃は、そうだな、俺たちと同じくらいか、もう少しだけ  
年下か。パープルのドレスを纏い、赤毛の頭には小さなティアラが  
乗っている。深い緑の瞳で俺たちをじーっと見つめるその姿はまる  
でフランス人形そのものである。

「そなたが、ユートか」

王が問いかけてくる。

「…は、はい」

緊張しすぎで返事しか出来ない。

「なんでも風の力を持つそうだな」

「…多分…」

俺の受け答えの情けなさに涙が出そうだ。

「その力、我にも見せてみよ」

そう言ってトニトルスを見ると、トニトルスは俺の前に出ると剣  
を抜く。

「ユートよ、私と剣を交えてみよ」

「ちょ！待てよ！剣をもって俺の剣ないじゃん！？」

「貴様には風の刃があるう？ウルフを倒した刃がな」

そんなめちやくちな！

風の刃って言ったってどうやって出すんだよ！

助けを求め美春を見るも、

「悠斗ならやれるわよ！頑張れ！」

応援されるだけで助けてはくれないらしい。ここは…覚悟を決めなくてはならないようだ…。

「貴様から来ぬなら私から行くぞ！」

トニトルスはそう言うつと剣を構え俺を睨みつける。

迫力ありすぎでめちやくちな怖いですけど…！

「か…風…風の…力…？」

ウルフの時をイメージしながら集中する。

風よ…力を貸してくれ…！

目を瞑り全神経を手のひらに集中させる。

ドククン、ドククン、ドククン。

「では、行くぞ！」

トニトルスが勢いよく駆けってくる。

そして俺は、風の力を……！

「や…やっぱ無理いいいい！」

トニトルスが勢いよく剣を振りかざしたその瞬間、俺はとっさに頭を庇いながらしゃがみこむ。

すると、部屋中にどよめきが走る。

「おお…」

「トニトルス様の剣をかわしたぞ…」

「悠斗やるじゃない！」

あ…あれ？

どうやら偶然にも剣をかわしたようだが…。

「ほう、なかなかやるではないか。それではこちらも少々本気を出した方がいいかな？」

な…なんだかとおつてもヤバイ予感がします！！

「い、いや、今のは偶然で…！」

弁解する暇もなくトニトルスは剣を振り下ろす。

「はあっ！」

「いや、ホントたんまつ…！！！」

もうダメだ…俺、ここで死ぬのかな…。

これ以上かわせる筈もなく、目を瞑り、頭を抱え身を丸くして運命に身をゆだねる。

心残りと言えば、最後の最後まで美春にカツコイイところを見せられなかったところだろうか。

しかし、いくら待っても切りつけられる気配がないようだ。

恐る恐る目を開けトニトルスがいる方を窺う。

すると、俺の頭部より30センチ程手前で剣が止まっている。

トニトルスが止めてくれた…？いや、違う。

よく見ると、俺の周りに薄い膜が張ってあるように見える。これは一体…。

「そこまです。トニトルス、お下がりなさい」

最初に声を発したのは皇女様だった。

「…」

トニトルスは無言で剣を納めると一礼して後ろへ下がる。

た…助かったのか？

気が緩んだ瞬間、パチン、という音がして膜のようなものが消えた。

「貴方の力、見させて頂きました。確かに、風の力のようですね。ただ、聞いていた物とは少し違うようです」

とりあえず俺は立ち上がる。が、さっきの恐怖がまだ消えないのが少し脚が震えている。

「あ、あの、俺…よく自分ではわからないんですけど…」

「…そう。自分の力をわかっていないの…。それであの防御結界が作れるなんて…」

皇女様は独り言でも言うかのように呟く。

「そなたらは”魔の森”から来たそうだな」

それまで黙っていた王様が急に話を振る。

「は…はい…」

「魔の森へ調査を出したところ、妙な町らしきものがあつたと聞く。あれは何だ？」

「あ…つと、あれは俺たちの住んでいた町で…」

「以前、森にはあの様なものはなかったが、どうやってきた」

俺は、今までの経緯を話した。

俺たちが住んでいた世界の事、不思議な風に見舞われてからおかしかった事、今までなかった森が急に現れた事…。

「ふむ…やはり、あれは異空間より現われし町、そなた達の住む”ニホン”の一角なのだ…では、夕べ西の森で観測された新たな次元の歪みは知っているかね」

！！？

え？なんだって？新たな…次元の歪み？

俺と美春は首を横に振る。

その時イシユカが前に出てきた。

「では、夕べ感じました異様な重みは、また異空間が現れたと！？」

そういえば、牢獄を出るときに変な重力を感じたな。

あれの事か？

王様は無言で頷く。

「私がお兄様に聞いたときは何も教えては下さらなかった…」

イシユカはぎゅつと唇を噛み締めつぶやく。

「して、その異空間だが…まだとても小さなものでな、最初はそこ  
のジーニー匹なら入るであろうくらいのもだった。だが、それが少  
しづつ拡大しているようなのだ。そなた達なら、何か知っているの  
ではないかと思つてな」

つまり、俺たちがアヤシイって思つてるといふ事か？

そんなのはお門違いも大概にしてくれつてやつだ！

俺が食つて掛かる前に美春が一步前に入る。

「陛下、私達を疑つておいでですか？」

「いや、何もそこまで言つてはおらぬ。ただ…」

「私達はその時、牢に閉じ込められていました」

いや、閉じ込められていたのは俺だけなんですけどね。

「とにかくだ、その異空間、魔の力を感じる…と、エルナが申して  
いてな。そなた達にもその調査をしてもらいたいのだ」

「なぜ、よそ者の私達が？」

「そなた達も異空間からの来訪者、詳しいのはそなた達であろうし、  
何より自分たちの来た世界への帰り道も見つけられるのではないか  
ね？」

なるほど。

帰り道が見つかるならそれも悪くない話だ。

だが、美春は怪訝そうな顔をしている。

何に不満があるのか。

「ユートよ、そなたはまだ自分の力がコントロール出来ぬようだ。

神殿で訓練を受けるがよい」

俺達はその後王の間を離れ、神殿に戻ることになる。

## 王ノ間（後書き）

やっと話が少し進みました。

ちょっと進むペース遅いですかね…（汗

頑張ってますが、次回は不定期です。

遅くても一週間以内には…。

## 訓練

王様との謁見より数日、俺達は神殿で訓練を積み確実に強く…なっているのは美春だけで、あれ以来俺は風の力の『か』の字もなく、とても肩身の狭い思いをしている。

ウルフを倒した時…トニトルスの一撃を受けた時…一体俺はどうやってあの力を出したのか。

イシユカ曰く、

「初心者には心を無にする事から始まります。心の中を無にして風の流れを読んで下さい」

…だそうだが…無になって簡単に言ってくれな。

第一、風の流れてなんだ？

そんな感じで、普通初心者が一番最初に出来るようになるはずの『そよ風』すら起こせないでいるのだ。

今日もひたすら練習しているのだが、あまりの落ちこぼれぶりにイシユカは頭を抱えどこかへ気分転換しに行ってしまった。

まったく、むしろ気分転換したいのは俺の方なのに…。

やれやれと室内練習場の窓から外を眺める。窓の外は中庭になっており、丁度美春がトニトルスと手合わせをしているところが見えた。

本来中庭はそういった目的の為にあるわけではないのだが、神殿には風術の練習場はあっても剣術の練習場はなく、城での稽古も拒否した美春の為に使用許可しているらしい。

そんなワガママを許してもらえないのは、美春が相当な腕の持ち主だからである。剣術はよくわからないが見た限り、隊長であるトニトルスですら押されているようである。

彼女の剣は相当な力があるわけではないが、俊敏で無駄がなく、

かつ確実に急所を突くのだ。

「やあっ!」「はあっ!」の掛け声と共に一振り、二振り。

トニトルスはこれを剣で受けるも表情は真剣そのもので余裕がない事が伺える。

キンツ!という音が聞こえると、美春の剣がトニトルスの剣を弾き、その切っ先は喉元を捕らえる。

美春はニコリと笑うとその剣を腰へと納めた。

「さすがミハル殿…このミトラルでもそれ程までに剣を扱える者はそういませんよ」

「そんな、トニトルスさんの教え方が上手だからですよ。手加減してもらわないと勝てないですもの」

そう笑って答える美春だが、トニトルスはそれを聞いて苦笑いをしている。あの顔は…とても手加減したと思えない顔である。

「それより…悠斗っ!」

美春の目が釣りあがり、こちらを振り向くと室内にいる俺の目を捉える。

「キミはいつになったら風術を使えるのかなあっ!?!ちゃんと練習してるのー!?!」

おお…こわっ…。

そんなに声を張り上げなくても聞こえてますよ…。

「わーってるよ!頑張ってるって!」

そう言い、練習に集中するふりをする。

それを見届けると、美春はすぐに自分の稽古に戻る。

汗を流しながら剣を振る彼女はキラキラと輝いてとても綺麗だ。

そんな彼女を目の前にして心を無になんて、とてもじゃないが無理な話である。

その時、後ろからカタンと音が聞こえた。

イシユカが戻ってきたのだろうか。

「イシユカごめん！俺頑張るよ！」

振り向き咄嗟に謝る。

だが、そこに立っていたのはイシユカではなかった。

「…イシユカには、席を外してもらいました」

なんと、皇女エルナである。

「え…あ、え…？なん、で？皇女様がここに…？」

「貴方と、お話がしたくて」

「え…お話…？」

「…」

「…」

何を話したらいいのかわからず、お互い無言になってしまつ。

「…貴方は…なぜここに…？」

「それ…王様の前でも言ったと思うんだけど…」

「あ、そ、そうでしたね。その、なんというか…どうしてあなた方だけがいらしたのでしょうか？」

「それは、むしろ俺たちが聞きたいくらいだぜ」

皇女様は何かを言いたげにしているようでモジモジとしている。

こんな事を聞きに来たわけではなさそうなのだが。

「皇女様は、」

「エルナ。で結構です。ユート」

俺の心臓が少し早くなってくる。

「あ、ああ…えっと、エルナ…」

「はい」

そう返事をしたエルナは少し潤んだ瞳で俺の目を捉えて離さない。

や…やばい！この展開は超ヤバイ！！  
モジモジ>名前で呼ぶ>潤んだ瞳！！

これは！絶対フ・ラ・ゲ！！！！

うおおおお！この超カワイイ皇女様は俺を好いている！？

マジか！？マジなのか！？

妹系姫さんにするべきか！お姉様系巫女にするべきか！やっぱり同級生剣士にするべきかっ！！

これを選べって結構酷じゃないかあっ！？

いや、でもまてよ。美春は愛とか恋というよりは、どちらかと言うと結構仲の良い男友達といった感じだろう。イシユカはちよつと見込みなさそうだよな…。

だがだが、その点エルナは…エルナは…俺を愛しちゃってるわけだろ！？

ここはやっぱりエルナなのか！？い…いや！だがそんな安易な理由でいいのか？愛されているからという理由だけで決めていいのか？彼女へ対する想いはどうなんだ？

…やっぱり俺は美春を見捨てることは出来ない。

ここで俺を失った美春はこの世界で誰を頼って生きていけばいいんだ。

俺が美春を守るんだ。

「すまない…エルナの気持ちは嬉しいが俺には美春という女が…」

「あの、何の話でしょうか…」

「……………え……………」

えーっと…あれ？

「あの、ユートは…」

「はい？」

「風の力はコントロール出来るようになりましたか？」

「あ、あはは…そっちの話ね…。はあ…」

「どうやら全然違ったようである。」

「潤んでいたように見えた瞳も俺の脳内再生だったようだ。」

「がっかりやら恥ずかしいやらで、落ち込みは半端なく、返事が尻  
容まりになる。」

「いえ…全然…」

「そうですね…以前私が見せて頂いたユートの力、思っていたもの  
と違ったので気になって」

「はあ…」

「私が見せて頂いた力は防御の力が働いていました。ですが、兵や  
神官達よりウルフを倒した時に攻撃の力を使ったようだ話を伺っ  
ています」

「はあ…それが何か？」

「普通、神官達の使う力は大きく分けて2つのパターン、攻撃系と  
防御系に分類され、そのどちらかを得意とします。極稀に風の声を  
聞ける者もいるようですが」

「それはつまり、イシユカの事か。」

「神官達の話が本当であるなら貴方は2つの力を持ち合わせている  
という事、それと、貴方は風の精霊の声も聞こえるそうですね」

「風の精霊っていうのは、多分この場合マシユマロの事だよな？」

「本人は否定してたけど…」

「マシユマロは…自分は精霊じゃないって言ってるが」

「ええ、存じております」

「あ、あれ？そんなんだ？」

「はい。厳密に言えば精霊ではないでしょうね。人々は精霊だと信  
じているようですが」

「厳密にってどういう意味だ？」

「ジーニ自身は精霊ではないでしょうが、ジーニは風の精霊が造り  
出した命。精霊の恩恵が一番に受け、その声を聞き、手足となり、

能力を分け与えられた存在。いわば精霊の子みたいなものでしょうか。その命は人の何十倍も永らえ、独自で子孫を残すという機能は持ち合わせていません」

「でもマシユマロには、じいちゃんがいたって…」

「それは以前に精霊より生み出された精霊の子。先代を親と呼んでいるのでしよう」

なるほど…精霊の子…じゃあ、やはりマシユマロが精霊だというのは全くの勘違いでもないのか。

「で、それが？」

「ジーニが精霊であるとするならば、貴方は風の声も聞こえるのですか？」

「あ…ああ…多分、あれが風の声であるなら聞こえてると言えるだろうな」

「そうですね。あなたは1つどころかいくつもの力を持っているようです。今はコントロールできないかもしれませんが、その力、使いこなせるようになるならば強大なものとなるでしょう」

「そうかな。そうだといいな」

美春に守られてばかりいるような男にはなりたくない。

俺が美春を守り、元の世界に帰る…！

俺は拳を握り締め決意を新たにす。

「ユート」

「なんだ？」

「貴方は、初めて会った時から不思議な感じのするお方でした…」

「？」

「貴方は…もしかしたら私にとって大事な方かもしれません」

！！！？

やっぱり！これはフ・ラ・ゲ！？

「え、それってどういう…」

「今はまだ、お話する時期ではありません」

そう言っていると踵を返し元来た扉へと向かう。

「そう、それと、先ほど言いましたがジーニ…マシユマロは風の精  
霊より恩恵を受けし精霊の子…近く置けば貴方の力を引き出しても  
らえるかもしれませぬ」

それだけを言い残しエルナは去っていく。

俺は暫く呆然とその後姿を見送るだけだった。

## 訓練（後書き）

お待たせしました！

やっと最初から数日たったお話です。

なかなか進むペースが遅いですが生暖かい目で見守ってくださいと嬉しいです。

次回も一週間以内がんばります。

## 失ワレタ兵

その日、城内は神官や兵達が集められ慌しかった。

そこには王やイシユカ、トニトルスもいたが悠斗達の姿はなかった。

「一体何があったのだ」

王の前には傷ついたアシエロトただ一人がいるだけであった。

「は…、我々は…調査を進めに森へと入ったのですが…ぐっ」

アシエロトは腹部に負った傷口を押さえながら報告を始める。

「…はあ…はあ…あの者達が現れたとされる奇妙な町を発見し…調査致しました…」

アシエロトは苦しそうにしながらもその調査報告を続ける。

「…そこでは我々が知る文明とは違うものを感じましたが…はあはあ…特に怪しいものは発見できず、更に奥への調査を進めました…」

「アシエロト、苦しいと思うが話してくれ、あれだけの小隊がいてお前一人で戻って来たとは…何が起きた」

トニトルスが先を促す。

無理も無い。

2日程前にアシエロトは30数名いる1個小隊を率い異空間を調べべく西の森へ向かったのだが、それが傷ついたアシエロトだけが戻り他の隊員は全て失ったというのだ。

「…その町はさほど大きいものではなく…あの者たちが言っていた公園らしき広場を抜けた先はまた森へと続いており…はあ…その奥に新たな異空間を発見致しました…ぐっ…はあはあ…。その異空間は…依然小さなもので…はあはあ…齢10程度の子どもであれば入

れるくらいのものでした…」

「なんと…、それではまた若干その空間が広がったという事が…」  
周りの神官達がざわつく。

「ですが…それは我々が行った時は…の話でございます」

「どういう意味だ？」

王が問うとアシエロトは俯いてしまふ。そしてしばらく間を空けた後、静かに答えた。

「…その異空間を調査すべく近づき、手を伸ばした時一人の兵が飲み込まれました…」

ざわざわざわざわ…。

「なんだと!？」

声を上げたのはトニトルスだった。

それを王は手で制する。

「…続けよ…」

「するとその空間は急に大人二人分ほどまで成長し、更に近づいた兵を一人飲み込み、その三倍は拡大し…」

アシエロトは言葉を詰まらせ拳を握りしめ、その拳をワナワナと震わせている。

「その空間より…魔物が…」

ざわざわざわざわ…。

「なんと…ではやはり魔が住むとは本当だったのか!」

神官の一人が声を上げる。

「その魔物にやられたと申すのか」

王が問う。

「はい…、私は兵に守られ一命を取り留めましたが…他の者は…」

王はため息を一つ洩らし頭を抱える。

「そうか…アシエロトよ、そなた一人でもよく戻った。その傷を癒し休むが良い」

アシエロトは神官達に連れられ王の間を後にする。イシユカは慌ててそれに続いて着いて行った。

「陛下、如何致しましょう」

声をかけたのはまだ幼さの残る少年であった。

「アシスカ」

アシスと呼ばれた少年は凜とした眼差しで王を見つめる。

アシスは王と第三皇后との間に生まれた第一皇子である。

「アシエロトはこの国でも指折りの風使いだ。それがあのような傷を負って帰るとは…魔物の力は相当のものである。アシスよ、前はまだ幼い。森へ向かうなどと言つてないぞ」

アシスはまだ15歳である。だが、この国ではすでに成人とされ1人の妃と2人の側室を迎えている。

だが、王と一番目の皇后との間に子は儲けられず、二番目の皇后との間の子はエルナだけ。三番目の皇后との間に生まれたアシスは唯一王位継承権を持つのである。王としては未来ある皇子をその様な危険な場所に行かせるわけにはいかないのだ。

「トニトルスよ」

「はっ」

「そろそろあの者たちも戦力になろう…連れて行け」

あの者達、とは当然の事ながら悠斗と美春の事である。

トニトルスは思わず眉間にしわを寄せる。

「……………ですが…陛下…」

「口答えは許さぬ」

王は時に非道である。

”よそ者ならどうなっても構わないであろう？”と言いたいのだ。

トニトルスは王のこういった所が嫌いであった。

「……………は…」

長い沈黙が精一杯の抵抗だったが、トニトルスに逆らう事は許されない。

トニトルスは一礼すると王の間を後にする。



## 失ワレタ兵（後書き）

一週間以内で頑張ると言いながら二日程遅れてしまいました。  
すみません。

次こそ一週間以内で！

## 傷付シ宮司

ここはアシエロトの寝室である。

王の間を出て間もなくアシエロトは意識を失い、ここへ運ばれたのだ。

側にはイシュカが付き添い、手を握り締めていた。

どの位の時間がたっただろうか。

「…イシュカ…か…」

薄く目を開けたアシエロトがイシュカに声をかける。

「お兄様…」

イシュカは運ばれてからずっと手を握っていたのだろうか。目を開けた兄を見て涙を溜める。

それを見たアシエロトは柔らかに微笑み涙を拭ってやる。

「泣くな。私は生きている」

しかし落ち着かせるために言った言葉はイシュカにとって逆効果だったようで、大粒の涙を流し始めてしまう。

だがそんな妹がアシエロトには愛しかった。

「笑っているお前もキレイだが泣く姿も美しいな…」

そう言いながらイシュカの頭を優しく撫でる。

普段は厳しいアシエロトだが、こういう時はとても優しくかった。しかし、すぐに厳しい目になる。

「…イシュカ…」

「…何でしょう」

「お前、アシス殿下に好意を持たれているようだな」

イシュカはアシス皇子が生まれた頃より傍におり、小さな頃は遊び

相手を、少し大きくなったあたりには世話係やら勉強やら作法など色々な事を教え、世話してきたのだ。イシュカにとっては年の離れた弟のようなものである。

優しく美しいイシュカを見て育ったアシスにイシュカを嫌う理由などなかった。

「そうですか、それは……とても光栄な事ですわ」

「殿下は、お前を側室に……と言っておられる」

「え……殿下が……私を……？」

アシスが好意を持っていた事は知っていたが、まさかそういう話まで出ているとは知らなかったイシュカは面を食らう。

「嫌なら私から断っておこう」

嫌です、と言いたい気持ちは山々だが、殿下が側室に迎えると言ったのならばそれはイエスかノーではなく決定事項なのである。誰が逆らえようか。

「……そういう訳には参りません……」

そう困惑しながら言うイシュカの眼をアシエロトは見つめてくる。

イシュカはまるで全てを見透かすような兄の眼が恐ろしくなり顔を逸らした。

こういう時のアシエロトは何を考えているかわからない……ひどく恐ろしい事を考えているのではないかと想像しぞっとする。

少しの沈黙の後、アシエロトが口を開いた。

「……時にイシュカよ」

「ユート殿とミハル殿はどうなっている」

「……はい……」

急に話を切りかえるアシエロトに違和感を覚えたイシュカではあったが、早く話を終えたかったイシュカにとっては好都合であった。

「ミハル様は元より腕の立つ御方。きつとあちらでも名のある剣士だったのでしょう。彼女の右に出る者はいないのではないのでしょうか」

「ふむ。して、ユート殿は」

「ユート様は…どうした事でしょうね…ジーニが側にいる時は微かに風が唸るのですが…確かに力はあるはずなのに引き出せないようです」

「そうか…」

アシエロトは静に答えると口を噤んだ。

## 傷付シ宮司（後書き）

次回不定期です。

年末忙しいかもなので・・年明けかもしれません。

頑張ります！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6586i/>

---

風の吹く世界

2011年1月27日01時55分発行